念仏のこころ

江上浄信

一

「たゞ念仏して弥陀にたすけられまひらすべし①」との「よきひとのおほせ②」は、生死罪濁の群萌の救いにもっとも適わしく、簡潔平明であったことはいうまでもない。しかし、その簡明な表現を安易に領受して、念仏の教えは却って形骸化し、その真精神は忘れられようとする。『末灯鈔』第十九通に、

法然聖人の御をしへを、よく〳〵御こゝろえたるひと〴〵にておはしますにさふらひき。さればこそ往生もめでたくしておはしましさふらへ。おほかたは、としごろ念仏まふしあひたまふひと〴〵のなかにも、ひとへにわがおもふさまなることをのみまふしあはれて候ひと〴〵もさふらひき。いまも、さぞさふらふらんと、おぼえさふらふ。

（『親全』三・書簡篇・一〇八）

聖人の御弟子にてさふらへども、やう〳〵に義をもいひかへなどして、身もまどひ、ひとをもまどはかしあふてさふらふめり。あさましきことにてさふらふなり。

（前同・一一〇）

という。この消息は「よきひと」法然的伝の本願念仏が曲解されていく状況に対する親鸞自身の悲傷と師教に基づく

顕真の記録である。親鸞にとって「としごろ念仏まふしあひたまふひと〳〵のなかに」、「わがおもふさまなることをのみまふし」、「身もまどひ、ひとをもまどはかし」、あさましき念仏信仰を見聞するにつけ、いかにしても「よきひと」から相承し、自身の厳しい宗教体験において、聞思し確かめえた本願念仏の真精神を顕彰せずにはいられなかったのである。

思えば、はじめて師教により、「雑行を棄てて本願に帰③」したのは「建仁辛の酉の暦④」親鸞二十九歳の時であった。師教によれば、念仏を選択するものは如来の本願であるという。この真理は師教によらなければ、永遠に知ることができなかったものであろう。この感激はいかに語ろうとも語りつくしえない慶喜である。それ故、「よきひと」の鴻恩が仰がれるにつけても、「よきひとのおほせ」が一筋に慕われ、その師教に思いをあらたにせずにいられなかったであろう。ここでは、わが身の「生死いづべき道⑤」を、ただ念仏の一道に確かめえた、その念仏のこころをたずねてみたい。

二

『教行信証』「行巻」に『選択本願念仏集』を引用するについて、親鸞は師教の眼目である「題号」、「標宗の文」と「総結三選の文」を以て『選択集』全体を代表させている。『尊号真像銘文』には、「標宗の文」の領解を、

「南無阿弥陀仏　往生之業　念仏為本」といふは、安養浄刹の往生の正因は念仏を本とすとまふすみことなり、正因といふは、浄土へむまるゝたねとまふすなり　（『親全』三・和文篇・五九）

といい、「総結三選の文」について、

「選応専正定」といふは、えらびて正定の業をふたごゝろなく修すべしとなり。「正定之業者即是称仏名」といふは、正定の業因はすなわちこれ仏名を称するなり、正定の因といふは、かならず無上涅槃のさとりをひらくた

ねとまふすなり。「称名必得生依仏本願故」といふは、仏のみなを称するはかならず安養浄土に往生をうるなり、仏の本願によるがゆへなりとのたまへり。

（前同・六一）

という。ここに親鸞は師教を「往生の正因は念仏を本とす」るのであり、「正定の業因」は「仏名をとなふるなり」として、衆生が称える称名念仏は、そのまま如来の「平等の慈悲」[6]の仏心そのものの具現としての「浄土真実の行選択本願の行」にほかならないと領解している。かかる念仏の受けとめは、『末灯鈔』第十二通、「有阿弥陀仏御返事」に、

弥陀の本願とまふすは、名号をとなへんものをば極楽へむかへんとちかはせたまひたるを、ふかく信じてとなふるがめでたきことにて候なり。…（中略）…されば念仏往生とふかく信じて、しかも名号をとなへんずるは、うたがひなき報土の往生にてあるべく候なり。

（『親全』三・書簡篇・八八）

といい、『同』第十一通、「覚信御房御返事」にも、

行とまふすは本願の名号をひとこゑとなへて、往生すとまふすことをききて、ひとこゑをもとなへ、もしは十念をもせんは行なり。

（前同・八六）

と説いている。この覚信房への消息は、行と信・信と行との不離を述べるものであり、「行と信とは御ちかひをまふすなり」[7]と結んでいるが、親鸞は煩悩悪業の衆生が称える称名を行としていることは明らかである。

いうまでもなく、第十八願は「設い我仏を得んに、十方の衆生、心を至し信楽して我が国に生まれんと欲ひて、乃至十念せん。若し生まれずば、正覚を取らじ。唯、五逆と正法を誹謗せんをばのぞく。」[8]という誓いである。この第十八願を法然は善導の指南によって、「乃至十念」を中心にして領解している。「乃至十念」とは一生涯をつくし、下は十声・一声にいたるまでの称名念仏であり、この念仏が本願に誓われた行であるから、これを修する者は、仏の本願に乗じて必ず往生すると確信したのである。その理由を語るものが、「本願章」の勝劣・難易の二義にほかならな

い。

法然は「偏依善導一師」[9]を標榜し、第十八願を「念仏往生の願」[10]とし、願文の中心を「乃至十念」において、「称名は必ず生まるることを得、仏の本願に依るが故に」[11]と受けとめ、念仏を本願の行と定めたのである。この濁悪不善の衆生が修する本願の行は、その根源を如来の本願の行にもつといわなければならない。

法然は「浄土に往生せんとおもはゞ、心と行との相応すべきなり」（『往生大要鈔』[12]）と、心・行の相応すべきことを説き、「念仏の行者、必ず三心を具足すべき」[13]であり、「四修の法を行用すべき」[14]であるという。三心とは『観経』の至誠心・深心・回向発願心、四修は『往生礼讃』・『西方要決』による長時修・慇重修・無余修・無間修であり、念仏を修する者の心の在り方と宗教的実践態度を示すものといえよう。しかし、法然にあっては、『西方指南鈔』に、

たゞ名号をとなふるに、三心おのづから具足する也と云り。（『親全』・輯録篇・一一一）

念仏をだにも申せば、三心は具足するなり。（前同・二八八）

といい、『一枚起請文』には、

三心・四修なむどと申す事の候は、皆決定して南無阿弥陀仏にて往生するぞと思ふ内にこもり候なり。（『聖全』四・四四）

と説くように、三心・四修は称名念仏そのものにおのずから具足するのである。『十二箇条問答』には「わが行のちから、わが心のいみじくて往生すべしとはおもはず、ほとけの願力のいみじくおはしますによりて、むまるべくもなき物もむまるべし」[15]と、称名念仏は自力の行ではなく、往生は願力によるとする。又、『浄土宗略要抄』には、

われらが自力にて生死をはなれぬべくば、かならずしも本願の行にかぎるべからずといへども、他力によらずば往生をとげがたきがゆへに、弥陀の本願のちからをかりて、一向に名号をとなへよと、善導はすゝめ給へる也。

自力といは、わがちからをはげみて往生をもとむる也。他力といは、たゞ仏のちからをたのみたてまつる也。

と、自力と他力の立場の相異を明らかにしている。蓋し念仏は衆生が称するという性格をもちながらも、念仏は他力の念仏であるというのはいかなる意味をあらわすのであろうか。

（『聖全』四・六二二）

三

法然は念仏往生の願にもとづき、選択本願念仏の仏道を説いたのであるが、親鸞は第十八願の至心・信楽・欲生は如来が三心を誓うものであり、衆生はこの如来より回向された真実信心を領受するところに、一念の信において救われると顕わしたのである。信は機に体得せられるものであるが、それはあくまで凡夫自力の発こすところではない。親鸞は「大信心」に具わる徳用について、十二句を以て讃え、その由って出る根本は第十八の「念仏往生の願」であるという。而して念仏を往生の行として選ばれた如来の願心を重視し、衆生の信心の根源が全く如来の願心にあることを顕わして「選択本願」、「本願三心の願」、「至心信楽の願」と名づけ、また二回向四法の綱格にもとづく「往相信心の願」と名づくべきであるという。[16]

「信巻」仏意釈[17]には、この世の群生は、無始よりこのかた今日の今に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心がなく、虚仮諂偽であり、真実の心がない。これはまさしく人間の歴史的事実である。如来は、このような一切苦悩の衆生を悲愍して如より来生して法蔵菩薩とあらわれたまい、五劫思惟して本願をおこし、兆載永劫の時をかけて菩薩の行を行ぜられたが、その間に身・口・意の三業に修されるところは、一念一刹那も清浄でなく真実でないことはなかったとし、このようにして清浄の真心を以て円融無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したもうた。而してその如来の真実心である「至心」をあらゆる一切煩悩・悪業・邪智にみちみちた群生海に回施されたのである。この「至心」は如来の「至徳の尊号」を体とするのであり、「信楽」は如来の「利他回向の至心」を体とし、「欲生」は「如来、

諸有の群生を招喚したまうの勅命」であって「真実の信楽」を体とするとし、この如来の至心・信楽・欲生の三心は衆生においては「疑蓋無雑」の信心として、如来はその至徳をめぐらしひるがえして衆生のためにさしむけあたえたもうた「真実の一心」におさまり、これを「金剛の真心」、「真実の信心」といい、この「大信心」を領受する瞬間に、われわれは往生する身と定まり、正定聚に住するという。親鸞は衆生の「証大涅槃の真因」は如来回向の大信心にあり、その根拠を如来の「至徳の尊号」に帰している。それでは、この衆生が領受する「真実信心」の根拠とは何であろうか。親鸞はこれを「大行」と名づけたのである。

真実の教『大無量寿経』は阿弥陀の本願を説くことを以て宗致とする。しかし阿弥陀の本願を説くといっても、それは阿弥陀の名号として用らくほかに教えとしての具体性はない。経の体が阿弥陀の名号であるということは、教は阿弥陀の名のりとして衆生の宗となるということである。親鸞はこの阿弥陀の名号を大行といい、「念仏もうす」といっている。『教行信証』「行巻」に、

諸仏称名の願　浄土真実の行　選択本願の行

（『親全』・教行信証・一六）

と標挙し、

謹んで往相の回向を按ずるに、大行あり、大信あり。大行といふは、則ち無碍光如来のみ名を称するなり。斯の行は、即ち是れ諸の善法を摂し、諸の徳本を具せり。極速円満す。真如一実の功徳宝海なり。故に大行と名づく。

（前同・一七）

と述べる。教行信証の四法が如来の回向であることは、「教巻」に明示されたが、正しく回向の中心となるものは行信である。しかもその行は如来の名号を回向されるのであり、名号はこれを選択された如来の願心から顕現するものであって、名号においてその願心の領受されるのが信であるから、行信不離である。十方諸仏によって称揚される名声は、そのまま十方衆生において聞信されなければならない。大行と大信を併せ標される所以である。かくて「大行

といふは則ち無碍光如来のみ名を称するなり」と、行の体が称名であることを示す。その称は口称であって、衆生において称えられるのであるが、称えるという用らきは如来の本願によるものであるから、いささかも称えるという功に執われるべきではない。行の徳用は全く「無碍光如来のみ名」という、み名の徳に帰せられる。その名はもとより「南無阿弥陀仏」である。それは天親の讃嘆する「尽十方無碍光如来」、無碍の威徳を具えた光如来のみ名であって、衆生の煩悩悪業に碍えられないで、摂取される力用を現すことを示している。したがってこの行は「摂諸善法具諸徳本」で、その性は真如一実の妙理を全うしたものであり、これを聞名信受する者に速やかにその功徳を満足せしめるから「大行」と名づけるいわれがある。

かかる「大行」の現成する根源は第十七「大悲の願」の成就によるという。それは仏の大悲はまさしく名号の回向によって成就されるからである。第十七願は、

設い我仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、悉く咨嗟して我が名を称せずは、正覚を取らじ。（『聖全』一・九）

と誓われる。それを『唯信鈔文意』には「十方無量の諸仏にわがなをほめられむとなえられむとちかひたまへる、一乗大智海の誓願[18]」という。ここに親鸞は第十七願を「諸仏称揚の願」、「諸仏称名の願」、「諸仏咨嗟の願」と名づけている。それのみならず、注目すべきことは、「往相回向の願」、「選択称名の願」と名づくべきなり、といっていることである。[19]それは諸仏にほめられ称えられる名号が、行・信・証の因果を悉く成じて回施され、「往相回向」の行としてはたらき、「十方微塵世界にあまねくひろまりすゝめ行ぜしめたまふ」（『唯信鈔文意』[20]）のであり、「ひとへに御なをとなふる人のみみな往生す」（同[21]）るのであって、如来が如来の行を衆生の行として選びとり、回施したもうところに、「選択称名」としての称名行が「大行」と名づけられる所以がある。かくて「大行」について、浄土の祖師の上に言葉の伝統をたずね、天親、曇鸞の用語である「称名」は、則ち善導、源信のいわゆる「正業」であり、正業は則ち法然の「念仏」であるとして、これを「南無阿弥陀仏」の名号に結帰している。したがって、称名も名号も念仏

も全く同義となり、ひとしく名号の徳と仰がれる。而して名号の義としての破闇満願の徳があらわれて、信となり「正念」となると説示する。願成就文には、

十方恒沙の諸仏如来、皆共に無量寿仏の威神功徳の不可思議なるを讃嘆したまふ。諸有衆生、其の名号を聞きて信心歓喜せんこと乃至一念せん。至心に回向せしめたまへり。彼の国に生まれんと願ぜば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯、五逆と誹謗正法とをば除く。

（『聖全』一・二四）

と説かれる。名号はまさしく如来の威神功徳の具体的表現であって、「諸有の衆生、其の名号を聞」いてということも、十方諸仏如来が称讃したもう如来の威神功徳の不可思議なる名号の功徳を聞いて、諸有の衆生は能く一念の浄信を発こすのであり、その一念の浄信は直ちに称無碍光如来の念仏として発露するにほかならない。その名号の意義を明らかにしたものが善導の六字釈である。

四

善導の六字釈は摂論家の人々が『観経』の十声称仏に依って往生を得ると説く経説に対して、別時意説を立て、称名には願の表現があっても願を満たす行がないから、実際は往生を得ないけれども、仮に往生を得ると説いた方便説であるといったのに答えたものである。即ち摂論家から論難された唯願無行に対して願行具足を説いたのが六字釈であるが、その主張の根拠は無有出離のわが身を悲しみ、この身のために起こった無縁の大悲、阿弥陀の本願をほかにしてはありえない。されば六字釈が直接答えようとするのは願行具足ということであるけれども、それはそのまま名号の意義を顕わすものである。

今此の『観経』の中の十声の称仏は、即ち十願十行具足せること有り。云何が具足する。「南無」と言ふは即ち是れ帰命なり、亦是れ発願回向の義なり、「阿弥陀仏」と言ふは、即ち是れ其の行なり。斯の義を以ての故に必

ず往生することを得。

（『親全』九・加点篇3・三一）

このように、帰命と発願回向の二義によって、南無が願という所以を明らかにする。善導は『観経』下下品「汝もし念ずるに能わずは、応に無量寿仏と称すべし」[22]の経説に即して乃至十念若不生者の誓いを聞きとり、自ずから至心に帰命せずにいられなかったし、至心に帰命するが故に自ずから願生せずにいられなかったのである。かくして南無は帰命の信心であり、帰命の信には自ずから願生の心を具し、ここに南無は即ち願といわれる所以が確かめられる。善導の直接的課題は称仏六字そのものに願行具足を証明することである。したがって南無が発願回向の義であることが証明されればよいのにもかかわらず、敢えて初めに南無を帰命ということには、次の発願回向をして真に成立せしめんがためにほかならない。何故なら如実の願は如実の信においてのみ可能であるからである。善導のいわゆる願行具足の願は、摂論家の論難する為楽願生のためでなく、三心釈に顕わされるように現に罪悪生死の身が救われる道は釈迦・弥陀二尊の意に信順する真実信心であり、金剛心であり、至心帰命の心であった。それ故、南無が真実の願であるためには南無が「即ち是れ帰命」であるという課題があったからであろう。ここに南無帰命の信には真実なる願往生心の必具する所以が明らかにされ、一声称仏には一願を具し、十声称仏には十願を具足する真の意義が確証される。

唯願無行の論難に答える願行具足の中核となるものが、「阿弥陀仏と言ふは即ち是れ其の行なり」である。ここには称南無阿弥陀仏の称名において阿弥陀仏の四字を称することが行とされていることが注目される。しかしここに、衆生の称名がいかにして真実の行といえるかということが問われるであろう。摂論家の論難のごとく、下品劣機の行ずる称名は別時意の劣行と見られるからである、ここにおいて注意すべきことは、「玄義分」第六門、第五会通別時意の結文である。

但能く上一形を尽くし、下十念に至るまで仏願力を以て皆往かずといふこと莫し。

（前同・三二）

この文は念仏衆生を摂取して捨てざる若不生者不取正覚の大悲そのものであり、無有出離之縁の善導が第十八念仏往

生の願言に聞き開いたものである。まさしく下品劣機の称名が真実の行とされる証拠もこれに依るのである。それ故に第十八願は弘願といわれ、

弘願と言ふは、『大経』に説くが如きは、一切善悪の凡夫生ずることを得る者は、皆阿弥陀仏の大願業力に乗じて増上縁と為ざること莫し。（前同・七）

と領受されている。阿弥陀仏の本願は、ただ称名念仏の一行を以て衆生往生の正定業と決定されたのであって、「是名正定之業順彼仏願故」とは確かな念仏真実の証明である。下々品の凡夫の行ずる易行の称名が「乗仏願力莫不皆往」の故にそのまま真実の行となるのは、ただ弘願そのものであり、願力増上縁それ自らの具体的な顕現であるからにほかならない。善友がひとえに「応称無量寿仏」と称名をすすめ、善導が確信をもって摂論家に返難し得た所以はここにあるといっていい。

まことに「阿弥陀仏と言ふは、即ち是れ其の行なり」という「阿弥陀仏」は、称南無阿弥陀仏の阿弥陀仏であり、それは仏の名であり、名によって表現された弘願の大悲そのものである。「応称無量寿仏」の無量寿仏は無量寿仏名であることは明らかである。すでに名であるということは、阿弥陀仏の救済意志の顕現として、下下品の愚人に最も相応するべく示された弥陀仏弘願大悲の積極的な自己表現である。阿弥陀仏は、

若し我れ仏を得んに、十方の衆生我が名号を称して、我国に生まれんと願じて、下十念に至りて、若し生まれずは、正覚を取らじといへり。今既に仏に成りたまへり。即ち是れ酬因の身なり。（前同・二二）

といい、「唯念仏の衆生を観そなはし、摂取して捨てざるが故に阿弥陀と名づ[23]」けるのであって、善導にとって仏は苦ある者に大悲し、偏に常没の衆生を愍念したまい、勧めて浄土に帰せしめ、水におぼれる人を偏に救う仏にほかならない。

まことに称南無阿弥陀仏の称名は「順彼仏願故」の称名であり、それは弥陀の願力の顕現にほかならない。それ故、

阿弥陀仏には必ず南無を具し、また南無には必ず阿弥陀仏を具す。したがって阿弥陀仏はそのまま南無阿弥陀仏であり、南無阿弥陀仏はまた阿弥陀仏であって、願行・二字四字は相即し、四字はそのまま六字として願行具足必得往生というのである。かくて下下品愚人の称名は阿弥陀願力の全現としての称名であり、願行ともに阿弥陀如来を増上縁とする真実の行であると領解される。されば、善導にとって念仏が真実の行である所以は、願行具足であるというよりも、称名念仏こそ如来の本願であるという深信である。根本的には「順彼仏願故」の行であり、弘願において決定された十声称仏であるという本質をいい当てたものと領解することができる。

五

親鸞は善導の六字釈を依りどころとして、更に詳細に特異な私釈を加え、弥陀回向の法としての大行称名のいわれを如来の本願に聞きひらこうとしたのである。善導の六字釈は『教行信証』「行巻」と『尊号真像銘文』に領解され、それぞれ約法釈・約機釈と一見矛盾するように見られる。しかしながら機法は交互媒介的に結びつくところに、却って宗教体験の内面的構造を明らかにするものである。「行巻」には名号釈を次のように説く。

爾れば、南無之言は帰命なり。帰の言は　至なり。又帰説〔よりたのむなり〕なり、説の字、悦音、又帰説〔よりかゝるなり〕なり、説の字は税の音、悦税二つの音は告ぐるなり、述なり、人の意を宣述るなり。　命の言は、業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり。　是を以て帰命は本願招喚の勅命なり。発願回向と言ふは、如来、已に発願して衆生の行を回施したまふの心なり。即是其行と言ふは、即ち選択本願是れなり。必得往生と言ふは、不退の位に至ることを獲ることを彰はすなり。『経』には即得と言へり、『釈』には必定と云へり、即の言は願力を聞くに由って、報土の真因決定する時剋の極促を光闡せるなり。必の言は、審なり、然なり、分極なり。　金剛心成就の貌なり。

（行巻『親全』一・四八）

善導の「言南無者即是帰命」を親鸞は「南無の言は帰命なり」と領受している。さらに「帰命」について、「帰」と「命」にわかち、字義を推求するについても、「帰の言は……」、「命の言は……」と尋ねている。ここに「言南無者」ではなく、「南無之言」といい、「帰言」「命言」と表しているのは何を意味するのであろうか。「南無」の文字について説明するのであれば、「言南無者」といっていいであろうし、「南無之言」、それはまさしく「如来如実言」[24]そのものと領解すべきであろう。とするならば、「精進なるこゝろもなし、懈怠のこゝろのみにして、うちはむなしくいつわり・かざり・へつらうこゝろのみつねにして、まことなるこゝろなき身」（『唯信鈔文意』[25]）の上に「南無之言」、南無ともうす「みことば」が、今ここに現れたことの確認であり、深い感動の表現であるといっていいであろう。親鸞は「大悲の願より出でた[26]る南無阿弥陀仏、即ち弥陀の回向に遇い難くして今遇うことを得たのであり、聞き難くして已に聞くことを得たのである。親鸞は「南無之言」のうちに、弥陀のまねき、よばう声を聞き、曠劫よりこのかた常に招喚されていた貪瞋の煩悩無明なる自己を信知したのである。

かくて「南無之言」を聞き取った親鸞は、さらに「帰命」の深意を尋ねるべく「帰言」、「命言」と丁寧に字訓、左訓を付し、善導の二河喩をかえりみつつ推求していることは、『銘文』の「帰命はすなわち釈迦・弥陀の二尊の勅命にしたがひ、めしにかなふとまふすことばなり[27]」という帰命釈によっても領解できる。字訓釈を承けて、「是を以て帰命は本願招喚の勅命なり」と、衆生の上に限定されやすい帰命の言を本願の大悲心から帰せよと招喚される教命として領受している。この帰命の事実こそ衆生を救済したもう阿弥陀の最も具体的なはたらきであり、阿弥陀如来の欲生我国の願心、すなわち「欲生と言ふは、則ち是れ如来、諸有の群生を招喚したまふの勅命」が帰命の信として今現在しているという深い頷きである。すでに「南無帰命」が生死に流転し業苦に迷惑しているわれをよびたまひ、本来のあるべき世界へあらしめようとする招喚の勅命であるとすれば、浄土に生まれんと願う心は、浄土へ生まれしめんとする阿弥陀の発願のあらわれ、「発願回向」であると頷かれる。そのかぎり南無阿弥陀仏とは、かぎりなく衆生に

先立って「如来、已に発願し」たもうものである。しかしながら、それはまた帰命の今をもって、その修せられた功徳の名号を「廻施」されるということにおいて、徹底して「衆生の行」となる。阿弥陀は自らを衆生の行とすることにおいて衆生の救いを成就する。それこそ、「発願回向と言ふは、如来、已に発願して衆生の行を回施したまふの心なり」と解される。

「即是其行」とは、善導が摂論家の唯願無行の論難に対する直接的応答であったが、その応答の根拠は如来の本願にあったごとく、南無阿弥陀仏は阿弥陀により選択された本願そのままの顕現にほかならないことを親鸞は「即是其行と言ふは、即ち選択本願是れなり」といい切るのである。それはまことに阿弥陀がその本願において選択摂取した「選択本願の行」であり、その本質としての無碍の願心そのものにほかならない。されば念仏は、臨終の一念にいたるまで、無明煩悩を頂点として貪瞋具足の身に変わるところなきわれわれの称名として現れつつ、それはどこまでもわれわれのものではなく、本来的に如来のものであり、それ故に大行であることがいよいよ明らかになる。

親鸞は「必得往生」について、「必得往生といふは、不退の位に至ることを獲ることを彰はすなり」という。ここにいう「不退」とは、退転なき道が現在に開かれることとして、現生不退、「現生に正定聚のくらゐに住[28]」する、「仏にかならずなるべきみとさだまるくらゐ[29]」というのである。このことは親鸞にとって、自身の現在の救いひとつにいかに真剣であったかを物語るものといえよう。かくして親鸞は善導の「必得往生」を、第十八願成就の文「即得往生」の「即得」と、『十住毘婆沙論』の「即時入必定」の「必定」とによってその意味を確かめ、「即得」とは「願力を聞くに由って、報土の真因決定する時剋の極促を光闡せるなり」といい、更に「必の言」と帰・命の字訓を推求した姿勢で三訓を挙げ、それに左訓・右訓を記し、そこに本願を信ずる心は、内なる煩悩にも、外なる雑縁にも破壊動乱されることもない「金剛心成就の貌なり」と深い感動を以てわれわれに告げている。

かくて親鸞は善導が六字釈に用いた各語句を通して、それぞれに如来の願力を仰ぎつつ、名号六字がことごとく本

願力の願言そのものであることを確かに聞きとっている。

上来、阿弥陀の名号について親鸞の領解の意味するところをたずねてきたが、帰命における勅命、発願回向における回施、即是其行における選択ということを『大経』に求めれば、選択は「五劫を具足して、荘厳仏国の清浄の行を思惟し摂取[31]」するにより、回施は「不可思議の兆載永劫において、菩薩の無量の徳行を積植[31]」するによる。されば勅命は「法蔵菩薩、今已に成仏して、現に西方に在ます。（乃至）成仏より已来、凡そ十劫を歴たまへり」という「今」の「みこと」として聞かれるのである。したがって勅命・回施・選択の次第は、「今」の事実に触れて、その事実を推求し、次第に宿世の久遠へと如来の作願展開の歴史に思いをなせるものである。念仏が選択されたことは如来の大悲心の思惟によるということである。このことは『選択集』に詳説されている。「本願章」は如来が何故に称名念仏を往生の行としたのかを問うている。その答は念仏は易行であり功徳が勝れ、諸善は難行であり、功徳が劣るからということである。しかし、その選択の根拠は、煩悩具足の凡夫に対する如来の大悲である。その法然の精神は親鸞に相承され、「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり[32]」と身証されたのである。

まことに如来は選択した念仏を衆生に回施せんがために永劫の修行をなされた。このことを明らかにするものは『教行信証』「信巻」であるが、それは如何に推求しても、ただ不可思議というほかはない。われわれはただ仰いで信ずるほかないであろう。かかる事実がないならば、称名念仏がどうして衆生の煩悩に満ちた生涯を転成して涅槃に向かうものとならしめることができよう。されば、永劫の修行ということも、念仏によって実証される久遠の真実でなければならない。かくて現に今ここに本願による回施は成就して招喚の勅命となったのである。その勅命は称名念仏において聞かれるのである。招喚の勅命がこの身に「今」聞こえたということが、すなわち称名念仏として現れたということである。本願招喚の勅命が聞こえた時節は、すなわち称名念仏の「今」であり、「今」の称名念仏は本願招喚の勅命が聞こえた時節である。その時節はすなわち如来選択の願心による回施の願力の成就する時節にほかなら

ない。

爾れば若しは行・若しは信、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまふところに非ざること有ること無し。因無くして他の因の有るには非ざるなりと。知る可し。（信巻・前同・一一五）

夫れ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。故に若しは因・若しは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへる所に非ざること有ること無し。因浄なるが故に、果亦浄なり。知る応しとなり。（証巻・前同・二〇一）

といい、智栄が善導を讃えた銘文を領解して、

「称仏六字」といふは、南無阿弥陀仏の六字をとなふるとなり。「即嘆仏」といふは、すなわち南無阿弥陀仏をとなふるはほめたてまつることばになるとなり。また「即懺悔」といふは、南無阿弥陀仏をとなふるは、すなわち無始よりこのかたの罪業を懺悔するになるとまふすなり。「即発願回向」といふは、南無阿弥陀仏をとなふるは、すなわち安楽浄土に往生せむとおもふになるとなり。（『親全』三・和文篇・五〇）

といわれる所以である。

①② 『歎異抄』（『親全』四・言行篇1・五）
③④ 『教行信証』「化身土巻」（『親全』一・三八一）
⑤ 『恵信尼書簡』（『親全』三・書簡篇・一八九）
⑥ 『選択集』（『聖全』一・九四五）
⑦ 『末灯鈔』第十一通（『親全』三・書簡篇・八七）
⑧ 『大無量寿経』（『聖全』一・九）
⑨ 『選択集』（前同・九九〇）
⑩ 前同（前同・九四六）

⑪ 前同（前同・九九〇）
⑫『聖全』四・三六九
⑬『選択集』（『聖全』一・九五七）
⑭ 前同（前同・九六七）
⑮『聖全』四・六三八
⑯『教行信証』「信巻」（『親全』一・九六）
⑰ 前同（前同・一一六）
⑱『唯信鈔文意』（『親全』三・和文篇・一六二）
⑲『教行信証』「行巻」（『親全』一・一七）
⑳『唯信鈔文意』（『親全』三・和文篇・一五七）
㉑『唯信鈔文意』（前同・一六二）
㉒『観無量寿経』（『聖全』一・六五）
㉓『往生礼讃』（前同・六五三）
㉔『教行信証』「行巻」（『親全』一・八六）
㉕『唯信鈔文意』（『親全』三・和文篇・一七九）
㉖『教行信証』「行巻」（『親全』一・一七）
㉗『尊号真像銘文』（『親全』三・和文篇・五三）
㉘『浄土三経往生文類』（前同・二一）
㉙『尊号真像銘文』（前同・四四）
㉚『大無量寿経』（『聖全』一・七）
㉛ 前同（前同・一五）
㉜『歎異抄』（『親全』四・言行篇1・三七）